横須賀市戦争犠牲者を慰め平和を祈念する集い
横須賀市長式辞

本日、ご遺族をはじめ、
多くのご来賓の皆様のご参列を賜り、
令和七年、横須賀市戦争犠牲者を慰め
平和を祈念する集いを執り行うにあたり、
謹んで式辞を申し述べます。

今ここに、安らかに鎮まる戦争犠牲者の諸霊は、
祖国の安寧を願い、愛する人や家族を案じつつも、
厳しく激しい戦場で、戦禍に倒れ、
尊い命を犠牲にされた御霊であります。
この式典が行われる度、
征きて還らぬ人々を思い起こされ、
往時に想いを馳せる方も、多いことと存じます。

先の大戦の終結から、早八十年の歳月が流れました。
八十年前、多くの命が犠牲となった、
未曽有の戦禍が終わり、
深い悲しみと喪失の中から我が国は、
新たな歩みを始めました。
そして、本年は、昭和で換算しますと、
「昭和百年」という節目の年でもあります。
昭和は、戦争、混乱、そして復興、発展と、

他に類を見ない、正に怒涛の時代であり、
戦没者の方々、またそのご遺族の皆様が、
辛い現実と向き合い、乗り越えてきた歴史の積み重ね、
そのものであります。
この間、横須賀市においても、
戦後の連合国軍による占領や、
浦賀、久里浜地区への引揚など、
幾多もの苦難に見舞われましたが、
それらすべてを乗り越え、今日まで、
多くの先達たちの知恵と努力と尽力により、
目覚ましい発展を遂げてまいりました。
このような、今日の平和と繁栄の礎は、紛れもなく、
戦争犠牲者の諸霊と、そのご遺族の御蔭であります。
改めまして、謹んで深く、
尊敬と感謝の意を表しますとともに、
これまでの皆様のご尽力に、
重ねて心からの御礼を申し上げる次第です。

戦争終結から長い年月が流れ、日本国民の多くが、
先の大戦を経験していない時代となりましたが、
世界に目を向けますと、各地で紛争が続き、
今、この時にも、多くの罪なき人々が、
悲惨な戦争の惨禍に、苛まれています。
今年、この昭和一〇〇年、そして戦後八十年という
二つの大きな節目を迎えることは、
改めて私たちに、戦争の悲惨さ、

そして平和の尊さを、決して忘れないようにと、
先人たちが、問いかけてくれているように思います。
過去の歴史と教訓を、先達たちから引継ぎ、
世代を超えて確実に未来に伝えていくことは、
現代を生きる私たちが担う、大きな責任です。
尊い御霊に対する、
そのため、この集いでは、遺族の方々をはじめ、
戦中・戦後をご経験されたご
一般の方々にも、ご参列いただくとともに、
本年は、平成、令和の世を生きている高校生に加え、
新たに小学生の皆さんにも、参加いただいております。

併せて、第二部において、
東京大空襲をテーマとした落語の特別公演を行います。
直接、戦争体験を伺う機会が減っていく中で、
若い世代が、戦争を知る人から話を聞き、
経験していない時代に触れ、今日享受している平和が、
当たり前のものではないということを考える、
貴重な機会になれば幸いです。
また、昨年の八月十五日には、
平和中央公園にある戦没者慰霊塔で、
小・中学生を中心とした
ガールスカウトの皆さんにご参加いただき、
献花式を行いました。
次の世代を担う若者達と、過去の戦災を振り返り、
平和の尊さを再認識するとともに、

お互いを認め合い、慈しみ合いながら、
支え合うことができる社会となるよう、
今後も発信を続けてまいる所存です。

私自身、政治家を志したのは、
ニューギニア戦線を経験した父の姿を目の当たりにし、
そこで受けた凄惨な過去を、
絶対に繰り返してはならないという
強い想いからであります。
本日、ご列席の皆様の中にも、同じような経験を、
なさった方もいらっしゃるかもしれません。
平和は当たり前にあるものではなく、
私たち一人一人が努力し、
守り続けていかねばならない尊いものであります。
戦後という時計の針を、決して零に戻すことなく、
過去の悲しみを、決して繰り返してはなりません。
改めまして、本日、戦後八十年の式典にあたり、
戦後から今日までの歳月の重みを、
深く理解するとともに、
平和への取り組みの強い決意を、新たにしています。
今後も、恒久平和の確立のため、
皆様と力を合わせ、引き続き、
全身全霊を尽くしていくことを、
ここにお誓いいたします。

結びとなりますが、安らかに鎮まる戦争犠牲者諸霊に、

重ねて衷心より、追悼の意を表するとともに、
ご遺族並びにご参列の皆様のご健勝、
ご多幸を心からお祈り申し上げまして、
私からの式辞といたします。

令和七年五月十八日

横須賀市長　上地　克明